
存在意義と早春の空

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

存在意義と早春の空

【Nコード】

N5100P

【作者名】

千葉

【あらすじ】

青く広がる空はきつと僕らの未来を暗示している

「そんなに大事なものの？」

「んー、大事ではないけれど、必要なの。」

「そう。じゃあやっぱり要らないね。」

そう言うと、彼は右手に握っていた小さな石を思い切り投げ捨てた。陽の光を反射してキラキラと輝く滑らかなその丸い小石は、あっという間に視界から消えて無くなった。

「必要だつて言ったのに。」

「お前に必要でも、俺には必要ない。」

じゃあやっぱり、ってどういうことだ。キツと彼の方を睨むが、彼はしらっとした表情を返すだけだった。

小石を投げ捨て空になった右手を、コートのポケットに突っ込みながらどこか満足げな声音でそう言いながら笑っている。

「自分勝手だよ。」

「知ってる。」

知ってるならどうしてこんなことするんだろう。嫌がらせとしか思えない。

いつだってそうだ。この人のやることは、いちいち意味がわからない。

「いいよ、わかってくれなくて。」

私の心の内を見透かしたかのように彼は言う。

彼はフツと微笑んだが、その眼にはぼんやりとした光しかなかった。

「俺だつてわかんないもん。」

「あつそ。」

彼の言葉に思わず脱力する。その眼に一瞬ひやりとしたのが馬鹿み
たいだ。

私は一步踏み出すと、目の前に山と積まれた鉄骨に乗り上げた。両
手を広げ、バランスを取りながら歩き出す。ギシギシと鈍い音をた
てて鉄骨が軋んだ。除々に遠ざかっていく私を、彼はただ眺めてい
た。

「あの石はさー、小さい頃に好きだった人にもらったものなのだよ。」

「

「お前の好きな奴は女に石ころを贈るような奴だったのか？」

「幼稚園の頃だもん。砂場に綺麗な石が落ちてたからって言って、
くれた。」

「それを十何年も律義に持ってたのかよ。」

「そうだよ。」

鉄骨の道が途切れた。

私はくるりと踵を返し、今まで通ってきた鉄骨の上をまた戻ってい
く。彼はまだ、じつと私の拳動を傍観している。

「大事じゃないけど、必要だったのか。」

「大事じゃないけど、必要だったのだ。」

彼の台詞をほとんど真似てそう返すと、彼はまたフツと笑みを浮べた。

いつも彼がする嘲笑染みた笑いとは少し違う種類のものだった。

「そいつ、どんな奴だったの？」

「覚えてない。」

「駄目じゃん。かわいそうに。」

彼が呆れた声を返す。顔も覚えられていない石ころの贈り主への同情を添えて。

私はただ、力無く笑ってみせた。

「でもなんか、必要な気がしてた。」

私は彼から数メートル離れた位置で立ち止まった。キシッと一ツ嫌な音を立てて、鉄骨の軋む騒がしい音も止まる。

彼も私と同じように、ヘラリと力の無い笑みを返した。

「そういうもんだよな。」

「うん。そういうもんなんだ。」

そして、お互いに声をあげて笑った。何がおかしいのかもわからないまま、二人で笑った。

ハタからそれを見る人が居れば、実に奇妙な光景に映ったことだろう。会話に中身は無いし、こんなに笑い合うような話でさえなかった。それでもなんだか、妙に気分が明るかったのだ。

未来のことはわからないままで、過去はただの踏み台で。今をただひたすらにおもしろおかしく生きられればいい。

たしか彼が昔そんなことを言っていたっけ。

あれから少し時が経って、今ではそんな生易しいことは言ってもらえなくなっただけで、そうやって生きられることがどんなに幸せなところかは、あの頃よりはわかったつもりだ。

「探して来てやろうか。」

「何を？」

「さっき俺が捨てた、あの石。」

「無理だよ。あんなに思いつ切り投げ捨ててたじゃん。」
「それもそうか。」

彼は困ったように笑って後ろ頭を掻いた。私は再び鉄骨の道を歩き始める。

ギシ、ギシ、と私が踏みしめるのに従って鉄骨が音を立て始める。

「別にいいよ。もう必要なくなった。」

「さっきまで必要だったのに？」

「うん。なんかもうどうでもよくなった。」

「なんだそれ。」

私は鉄骨の道を歩き終え、彼の前に降り立った。

私のよりも少し高い位置にある彼の眼を見上げる。彼の真っ直ぐな視線と私のそれがかち合った。

「過去は踏み台にしないといけないからね。」

につこりと笑いながらの私の言葉に、一瞬彼はきよとした表情を返す。

けれどすぐにまた、ヘラリと微笑んだ。

「それもそうだな。」

単純で単調な日常は、思い切り笑い飛ばすという行為さえ覚えればとても新鮮なものになる。

そのことも、あの頃よりはわかったつもり。

いくらかあの頃よりも難しくなったけれど、過去を踏み台に今を大事に生きよう。

それを思い出させることがあの石の存在意義で、私にとって必要だった理由なのだろう。

顔も名前も覚えていない、幼稚園児の贈り主に私は感謝した。

見上げた空は、先ほどよりもいくらか青い気がした。

きつと今日は良い日になるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5100p/>

存在意義と早春の空

2010年12月15日07時53分発行